

大阪産業大学 入試対策講座

国 語

夕陽丘予備校

国語講師

鶴見 貴之

専修学校 夕陽丘予備校

国語(現代文)必勝法

担当・鶴見貴之(夕陽丘予備校)

国語の出題傾向

○国語は現代文のみの出題で90分で二科目

○設問内容は、

①漢字の書き取り

②漢字の読み

③接続語(副詞を含む)の空欄補充

④語句補充

⑤語意説明

⑥脱文挿入

⑦空欄補充

などで全てマーク式

○難度と分量

文章の難度は標準的で読みやすく、分量も時間に対して多すぎはしない

(設問の大半は空欄補充問題⇨コトバの力を試される設問であり、分からないものは後回しにすれば良い)

○文章は日本の社会や歴史について、ありふれた見方とは一線を画したユニークな見方で読み解く内容が多く出題

読み方と解き方

○文章を読む際には、具体例の前後や逆接・否定語の後ろなどに注目し、できれば傍線を付しながら読み進めるのが良いだろう(同じ箇所を何度も読み返すよりは、ゆっくりでもいいので一度で読み取るようにしたい↓時間の節約に)

○漢字は知識と同時に言葉の力も試されていることを意識しながら解答したい

○接続語(副詞を含む)はそもそも種類や使い方を問われているのでありフリーリングで答えると間違うことを意識

○語句補充も補充すべき語句の意味と使い方を問われている

○語意説明は知識である程度絞り(ここで決定できるのが理想ではある)文脈に合わせて決定する

○脱文挿入(主に問1に出題)では、まず主語などから話題を捉え、それに近い候補をいくつか選定し、その中から接続関係(指示語や接続語、繰り返し)が正しく整う部分を選ぶようにする

実際にチャレンジしてみよう(模擬問題作成は夕陽丘予備校)

次の文章を読んで後の問いに答えなさい

太平洋戦争の敗北によって日本民族は実に情ない姿をさらけ出した。この情勢に応じて日本民族の劣等性を力説するとうようなことはわたくしの A ところではない。有限な人間存在にあつては、どれほど優れたものにも欠点や弱所はある。その欠点の指摘は、人々が日本民族の優秀性を空虚な言葉で誇示していた時にこそ最も必要であった。今はむしろ日本民族の優秀な面に対する落ちついた認識を誘い出し、悲境にあるこの民族を少しでも力づけるべき時ではないかと思われる。(1)

しかし人々が否応なしにおのれの欠点や弱所を自覚せしめられている時に、ただその上に罵倒の言葉を投げかけるだけでなく、その欠点や弱所の深刻な反省を試み、何がわれわれに足りないのであるかを精確に把握して置くことは、この欠点を克服するためにも必須の仕事である。その欠点は一口に言えば科学的・精神的欠如であろう。合理的な思索を蔑視して偏狭な狂信に動いた人々が、日本民族を現在の悲境に導き入れた。がそういうことの起り得た背後には、直観的な事実へのみ信頼を置き、推理力による把握を重んじないという民族の性向が控えている。推理力によって確

実に認識せられ得ることに對してさえも、やつて見なくては解らないと感ずるのがこの民族の癖である。(2)

ところでこの欠点は、一朝一夕にして成り立ったものではない。近世の初めに新しい科学が發展し始めて以来、欧米人は三百年の歳月を費してこの科学の精神を生活の隅々にまで浸透させて行つた。

① 日本民族は、この發展が始まつた途端に国を鎖じ、その後二百五十年の間、国家の権力を以てこの近世の精神の影響を遮断した。これは非常な相違である。この二百五十年の間の科学の發展が世界史の上で未曾有のものであっただけに、この相違もまた深刻だといわなくてはならぬ。それは、この發展の成果を急激に輸入することによって、何とか補いをつけ得るというようなものではなかつた。だから最新の科学の成果を利用している人が同時に最も浅ましい狂信者であるというような奇妙な現象さえも起つて來たのである。(3)

して見るとこの欠点の把握には、鎖国が何を意味していたかを十分に理解することが必要である。それは歴史の問題であるが、しかし歴史家はその点を明かに理解させてはくれなかつた。歴史家が力を注いだのは、この鎖国の間に日本において創造せられた世にも珍らしい閉鎖的文化を明かにすることである。それはさまざまの美しいものや優れたもの、再びすることの出来ない個性的なものをわれわれに伝えた。それを明かにすることは確かに意義ある仕事である。② それらのものの代償としてわれわれがいくに多くを失つたかということもまたわれわれは承知してゐなくてはならない。その問題をわれわれはここで取り上げようとするのである。(4)

がその問題に入り込む前に、近世が始まるまでの、従つて鎖国というようなことが総じて問題になるまでの、世界の歴史的情勢を概観して置きたいと思う。鎖国が問題になるのは世界的な交通が始まつたからであつて、一つの世界への動きは既にそこに見られる。鎖国とは一つの世界への動きを拒む態度である。従つてそれが問題になる以前の時代には、世界は多くの世界に分れてゐた。そうしてそのなかでヨーロッパ的世界が特に進歩しているというわけでもなかつた。しかし近世の運動はヨーロッパから、始まつたのであるから、先ずそこから始めよう。

ローマ帝国が地中海を環る諸地方を統一して当時のヨーロッパ人にとつての世界帝国となつたとき、それはまたこれらの諸地方の一切の古代史の集注するところでもあつた。それは地理的にも歴史的にも東と西との総合を意味している。この普遍的な世界において、普遍的な政治や法律や文芸や宗教が形成せられたのである。その普遍性がインドの世界やシナの世界を含まず、従つて真に普遍的となつていなかったとしても、彼らにとつての東方と西方との世界、そこに存するさまざまの民族、に対して普遍であつたことは、疑いがない。またそれを通じて把握せられた普遍性の理念は、その後の分裂的な民族国家や対立的世界に対して、常により高き人倫的段階を指示するものとして作用することが出来た。(5)

この普遍的な世界の崩壊は二つの方面から起つた。一はゲルマン人の侵入であり、他はアラビヤ人の来征である。ゲルマン人のローマ帝国への侵透は極めて長期に亘つて行われた。初めは傭兵として部分的に入り込み、或は北方の国境地方に於て徐々に侵透しつつあつたのであるが、四世紀末の民族大移動につれて旺然とローマ帝国内になだれ込むようになった。その或者は女子供や生活資材を携えた民族の集団がそのまま軍隊として行動したのであつて、帝国を征服したというよりもむしろ帝国の版図内に入り込んで宿営したと云う方が當つてゐる。彼らは土地の住民と妥協し、ローマ末期の宿営権に基いて、その土地の三分の一乃至三分の二を所有したのであつた。従つてローマ人の権利や制度はその儘に残され、行政もゲルマン人が参加するのみでもとの儘であつた。これは同じ土地に二つの生活がBことを意味する。ゲルマン人は軍人であり、アリウス派であり、おのれの部族法に従つてゐるが、ローマ人は非戦闘員であり、カトリックであり、ローマ法に従つてゐる。かくてゲルマン人は、世界帝国の内部に新しい郷土を獲得したのであつて、新しい国家を形成したとは考えてゐなかつた。イタリアからスペインにまで拡がったゴート族やブルゴーニュの地名を残したブルグンド族などがそのよき例である。が他方には原住地を根拠地としてそこから帝国の版図内に植民して行く種族もあつた。このやり方では、ローマ人と並存するのではなくして、むしろそれを征

服したのである。後のフランスの基礎を置いたフランク族がそうであつた。後のイギリスの基礎を置いたアングロ・サクソン族に至つては、ローマの習俗全部を壊滅せしめたと云われている。(6)

こういう二つのやり方でゲルマン人は五世紀から六世紀へかけてローマ帝国の中へ無秩序に入り込んで行つた。その間にフン族の王アッチラの来襲とか、ゲルマン傭兵の指揮者オドアケルによる西ローマ帝国の滅亡(476)とか、東ゴート族のテオドリックによるオドアケル討伐とか、ロムバード族のイタリア占領とかの如き事件が起り、ローマ帝国の西欧側は完全に壊滅に歸した。

がゲルマン諸族の侵入はその後もなお数世紀に亘つて続いて居り、ローマ帝国の廢墟から西欧の文化世界が明白に形成されるまでには、なお三百年の年月と、そうして他のもう一つの有力な契機、即ちアラビア人の侵入が必要であつた。

ローマ帝国の版図を東方・南方・西方に亘つてゲルマン人以上に広く侵蝕したのはアラビア人であるが、この東方からの侵入の起点はモハメッド(570—632)である。彼はセム族に普遍的アラール(Allah, hebr. Elohim)の信仰に新鮮な活気を与え、ユデア教やキリスト教の要素を取り入れて新しい民族宗教を作り上げた。それは一神への絶対服従の態度の故にイスラム(Islam)と呼ばれ、その信者(Moslem)は予言者及びその後継者(Kalif)を首長(Imam)として頂く固い宗教的共同体を形成している。その信仰の情熱は戦闘的な拡大を目ざす態度となつて現われ、極めて迅速に西に向つてはローマ帝国、東に向つてはペルシアと戦端を開いた。そうして教祖の死後十年には既に西アジア全体とエジプトとをトリポリタニアまで征服した。アレキサンダー大王の作つた『一つの世界』はここに崩壊し、東方と西方とを統一したローマ帝国もその東方を失ひ去つたのである。

かく急激に成立した宗教的戦闘的な世界帝国は、それが世界的となつたまさにその理由によつて、種々の変質や反動を閱せざるを得なかつた。オマイヤ朝(661—750)はカリフの權威を倒して純粹に世俗的な支配を樹立したもので、国都をもメヂナからダマスクスへ移した。その頃からイスラムの内に持続的な分裂が引き起されたのである。が征服事業は依然として続けられている。東方は中央アジアや北インドまで、西方はアフリカ北岸を海峡まで七世紀の

末に進出した。ヨーロッパへの侵入はまず初めにコンスタンチノープルを襲ったのであるが、八世紀の初めには西方スペインに侵入し、西ゴート族を打ち破って(711)半島全部を征服した。更にピレネー山脈を越えて(720)、フランスの中部にまで進出したが、これはフランク人によって撃退された(732)。しかしスペインに於けるイスラムの支配はこの後永い間続くのである。なおこれと並行して地中海の海上権力もまたアラビア人の掌握するところとなった。沿岸の諸地方や島々は彼らに侵略され、占領された。中でも『目ぼしい』のはシチリアの征服(827)である。こうして『東方』の力は『西方』の世界の心臓部に近く迫って来たのである。

西欧の文化世界の形成のためにアラビア人の侵入が必要であったというのは、この『東方』と『西方』との対立を指すのである。西欧の世界の形成のためにはまさにこの『東方』の圧力が必要であった。ローマ帝国に侵入したゲルマン諸族の間に初めて統一の『萌芽』が見え、初めて国家を強力に形成したのは、前述のアラビア人の侵入を中部フランスに於てカール・マルテルが打ち破った頃からである。が重要なのはただこのような武力的圧迫のみではない。我々は当時のゲルマン諸族が文化的にはなお野蛮と呼ぶべき段階にあったのに対して、スペインに尖端を置くイスラムの文化が遙かに高い段階に達していたことを見のがしてはならぬ。

ゲルマン諸族は十一世紀に至るまでもなお野蛮であったと云われる。彼らはローマ時代の制度文物を荒廃せしめたのみで、おのれ自身は何ら新しいものを作り出し得なかった。従って彼らの侵入以来数世紀間の世界的な出来事は、実はその侵入に悩みつつあったローマ人の力によるのである。その内特に注目すべきはローマの統一教会の

I である。元来キリスト教がローマ帝国に於て公認され、次で国教とせられるに至ったのは、ゲルマンの侵入よりあまり古いことではない。帝国の首都を東に移したコンスタンチヌス大帝がその統一の事業のためにキリスト教徒の勢力を利用し、その挙句この教を公の宗教として認許したのは三三三年であって、民族大移動の開始に先だつこと僅か六十年である。この皇帝は自らも信者となつたために、在来迫害されて来たキリスト教は反ってローマ旧来の諸教よりも優勢となったが、しかし四世紀はなお異教との対立抗争に充たされている。テオドーシウス大帝がキリスト教以外の宗教を厳禁したのは三九五年であって民族移動開始後既に二十年を経ている。カトリック教会の最大の

天才とも云うべきアウグスチヌスは実にこのゲルマン侵入の時期に仕事をしたのであった。彼の有名な回心は三八六年のことであり、彼の名著『神国論』は、四一〇年のアラリックのローマ劫略によつて全帝国が狼狽し湧き返っているさ中に、この帝国と教会との危機を救うべく、四一三年から書き始められたのである。その直接の意図は帝国の危機をキリスト教の責に帰しようとする保守的なローマ人異教徒に対して駁撃を加えるにあつたが、しかし彼の預言者的眼光は、ローマ帝国の崩壊と、かかる現世的流転を超越せる永遠なる神の国の姿とを洞見し、来るべき時代を予示している。即ち彼に於て帝国内の異教徒との戦が外より侵入し来るゲルマンの異教徒との戦と接続しているのである。『神の国』の著述は十五年の年月を要し四二七年に完成したのであるが、その後三年を経ずしてヴァンダル族は北アフリカの彼の町ヒッポへも押し寄せて来た。彼は敵軍重囲の内に四三〇年に死んだのである。がかく異教徒と戦うことは教会をますます強靱ならしめ、西ローマ帝国が亡んだ(476)後に反つて精神的な世界帝国の理念を育成している。特にフランク族の王クロヴィスの改宗はこの傾向にⅡ。元来ローマの司教は諸地方の司教と同じく papa と呼ばれ、それが帝国の首府に位置するという以外に特別の優位を持たなかつたのであるが、その papa の尊称や使徒の座の資格を独占して『法王』或は『教皇』と訳さるる如き意義を帯びしむるに至つたのは、むしろこの時代以後のことなのである。それはローマ文明の荒廃と反比例して高まつて行つた。六世紀に於て学芸の伝統を保持していたのは、現世的に無力となり終つた知識人の隠遁所としてその頃始められた修道院のみであつたが、そこから出た教皇グレゴリウス一世(590—604)は、アングロ・サクソンの教化に成功したのを初めとして多くのゲルマン諸族をカトリック教会の中に取り入れ、ローマの司教を最高の司教として仰ぐに至らしめたと云われる。キリスト教が真に深くゲルマン諸族の中に根を下したのはなお三百年も後のことであるが、しかしゲルマン人の武力が現実を支配している西欧の世界に於て、文化的に着々とその発展を見せたものは、ローマの教会の他にないのである。

(和辻哲郎「鎖国 日本の悲劇」による)

問一 次の文章は(1)～(6)のどの段落の後に入っていたものか、最も適當だと思われるところを選んでマークせよ。

それが浅ましい狂信のはびこる温床であった。またそこから千種万様の欠点が導き出されて来たのである。

問二 空欄 A～B には、つぎのどの動詞の活用形を入れるのが最も適當か、それぞれ一つ選んでマークせよ(同じ動詞を二度用いてはならない)。

- 1 理解する 2 分裂する 3 併存する 4 欲する

問三 空欄 ①～② には、つぎのどの言葉を入れるのが最も適當か、それぞれ一つ選んでマークせよ(同じ動詞を二度用いてはならない)。

- 1 しかし 2 しかるに 3 すべからく 4 それゆえに

問四 傍線 イ～ロ の本文中における意味として最も適當なものを、それぞれの中から一つ選んでマークせよ。

- イ 目ぼしい | 1 好ましい 2 転機になる 3 ひどい 4 価値がある
ロ 萌し | 1 意志 2 決意 3 気配 4 歴史

問五 空欄 I には、次のどの言葉を入れるのが最も適當か、一つ選んでマークせよ。

- 1 強化発展 2 整理統合 3 換骨奪胎 4 進化変身

問六 空欄 II には、次のどの言葉を入れるのが最も適當か、一つ選んでマークせよ。

- 1 歓声を投げかけた 2 拍車をかけた 3 待ったをかけた 4 疑問を投げかけた

今後の対策

- とにかく「ことばの力」を重視する出題内容なので、辞書をしっかり引く癖をつけよう
- さらに過去問を使って時間内に問題を解ききると同時に設問の選択肢の言葉を辞書で調べるなどして語彙力を高めよう
- 意外と漢字が重要なポイントなので、漢字の練習も忘れずに！